第二章　垂直正中線脱落（大悟の論理的説明･時空前後際断）

本章では、私が造語した「垂直正中線脱落」の用語を明らかにしておきたい。なぜなら、身心脱落体験の全体構造を論理的に表現するためである。

垂直正中線脱落とは、自己の全身心と凡夫の世界と仏の世界の一体(即・蔵身・調和・脱落)を、論理的に明らかにするために造語したものである。自己は一個体の存在では有るけれども、万象が集約し蔵身されていると認識すべきなのである。

垂直正中線脱落の、垂直とは無形の一本の垂直線が、尽宇宙世界に貫通されている無限領域世界（永遠）のことである。仏の世界と凡夫の世界から前と後が際断され脱落している。時間的な過去と未来を脱落し、空間の左右前後を透脱している。禅師の言葉では前後際断である。

正中線は、中道・調和・蔵身・即一の意味である。正中とは、凡夫即仏の中、宇宙即自己の中、過去即未来の中、思量即不思量の中、自己即実相の中をあらわしている。

線とは、正中を貫通・透脱・脱落することである。無限領域の垂直線であり、中と即を貫通し透脱した一本の垂直線を線と表示している。身心脱落の内証の全体験を、垂直正中線脱落のロジックをもって、解明しようと考え造語した。凡夫が見ている時空世界と仏が覚知し体験する正法眼の無限領域世界を、垂直正中線脱落で解き明かすことが出来ると考えたからだ。

1　凡夫の時空観と仏の時空観

前文に戻って論を進めてみよう。禅師は有時巻で凡夫と仏の時空観の差異をこの様に示されている。

〔1〕　凡夫の時空観(三次元の縦・横・高さ・一次元の過去、現在、未来)

（1）　十二時の長遠短促、度量せず。去来の方跡、人疑著せず(直線時間・二十四時間への疑問)。

（2）　たとゑば、河をすぎ山をすぎしがごとくなりと(自己と時間進行・客観世界は別時空認識への錯覚)。

（3）　経歴といふは、風雨の東西するがごとく学しきたるべからず(一方向に直線的に進行する時間観に対する誤解)

（4）　経歴をいふに、境(三次元宇宙・客観)は外頭にして、能(自己・主観)経歴の法は東にむきて百千世界をゆきすぎて、百千万劫をふると思う云々(自己の身心が他の無限の宇宙に移動し、現在の時空は其のまま存在する)。

〔2〕　仏の時空観(自己・時間・空間・実相における四次元的円融)

（1）　有時(森羅万象の全てが時間であり仏の世界である)。

（2）　時即有、有即時(自己即時間即空間一体)。

（3）　時々が尽有尽界あるなり(森羅万象一切が時間である)。

（4）　山をのぼり河をわたりし時に、われに時あるべし(自己が時間である。全宇宙が自己に蔵身されている)。

（5）　時さるべからず(自己は過去即未来を超越し、他に移動なし)。

（6）　古今の時、かさなれるにあらず並びつもれるにあらず(過去は過去で全宇宙

が全一、即時は即時で全宇宙が全一)。
（７）　春の経歴はなるがゆへに、経歴いま春の時に成道せり(春即時節即成道)。
（８）　山も時なり、海も時なり、時にあらざれば山海あるべからす(一切が時間。山も時間、海も時間、自己も時間、)。
（９）　時もし壊すれば山海も壊す、時もし不壊なれば山海も不壊なり(自己が死滅ときは全宇宙が消滅し山海も滅する。自己が不滅の時は山海も不滅である)。

凡夫の時空観と仏の時空観の差異を簡略に示してみた。

本来、凡夫の時空世界と仏の世界の二つは分離しているわけではない。自己の身心も時間も空間も仏の世界とは一体である。自己と仏の世界を仏教の経典ではこのように説かれている。華厳経では事即理・般若経では色即空・涅槃経では衆生即仏性・法華経では諸法即実相等々である。凡夫の身心と、事(華厳経)・色(般若心経)・衆生(涅槃経)・諸法(法華経)は即、一体、円融・蔵身なのである。理即事、空即色、仏性即衆生、実相即諸法は不二なのだ。有時の巻で説明すれば、凡夫の十二時(二十四時間・有・時)と時さるべからず(不滅・不進行・実相・仏性等々)は一体蔵身の関係で成立しているのである。仏教の教えは凡夫と仏は一如と説くのである。

２　当観時節因縁(凡夫時空即仏時空の脱落)

では、凡夫と仏の世界がいかに一体蔵身されているのかを、仏性巻の当観と電車の瑜話と坐禅の非思量で説明してみよう。禅師は眼蔵第三「仏性」巻で当観をこのように説かれている。

仏言、「欲知仏性義、当観時節因縁。時節若至、仏性現前」。《仏の言はく「仏性の義を知らんと欲はば、まさに時節因縁を観ずべし。時節若し至れば、仏性現前す》」。

禅師は仏の言葉に対し、自らの見解をこのように述べている。

「当観なるがゆへに不自観なり、不他観なり。時節因縁蹔なり、超越因縁なり。仏性蹔なり、脱体仏性なり、仏々蹔なり性々蹔なり」

当観の全体の境地は、自己、他己、尽宇宙から解脱した悟りの境地である。そのことが、不自観、不他観である。当観は、自己と尽宇宙・主観と客観・不自（非自己・非主観）と不他（非他己・非客観）から脱落していることが理解できる。そして、禅師は存在論・空間論の自己と宇宙の脱落を明らかにしたのち、次に時節（時）と因縁を明らかにする。

「時節因縁蹔なり、超越因縁なり。仏性なり、脱体仏性なり、仏々蹔なり、性々蹔なり」、

時節因縁蹔なりの、時節とは時間のことである。ただ凡夫の過去→現在→未来に進行する時間のことではない。過去と未来から前と後が際断した仏の時間である。因縁とは縁起・存在・原因・結果、空間と等々のことである。超越因縁とは因縁を超えるであるから、自己・他己・空間、原因、結果を脱落した境地であることが読み取れる。
このように、時節因縁蹔の境地は、自己の身心全体の時間(生滅)と存在全体(身・心)

と空間（客観）が、蘊、そのまま仏の境地であることが理解できる。超越因縁なりとは、因縁（思量と不思量・因と縁・原因と結果）を超越(脱落)しであるから、自己（主観）と他己（客観）からも脱落することであることが理解できる。時節因縁(自己・時間・空間)がそのまま蘊の仏の境地(非思量)であり、因縁(原因と結果)からも脱落しているのだ。

次の、仏性なりの仏性とは、真理性・実相・月・不思量・不進行・不滅のことである。脱体仏性とは，仏性である真理性、実相、月、不思量等々からも脱落する意味である。

仏々蘊なり、仏々とは因縁(身・心・舟・雲・岸・存在・空間・主観・客観)も脱落しているのだから、現成している当体がそのまま蘊で仏全体である。性々蘊とは、性の意味は仏性・月、不思量のことであり、仏性も脱落している境地を表わし、仏々・性々とは、説似即不中のことで言葉を超えた仏心の境位のことである。仏々蘊、性々蘊とは、生仏も脱落、性も脱落した、説似即不中の非思量地を云う。

禅師の当観(非思量)の境地は、自己・時間・因縁・空間・思量・不思量、仏性・生仏から脱落した境地であることが読み取れる。

3　当観

仏性巻の当観とは、主観と客観、自己と他己の、一切の二見を脱落している境地のことであり、前文で明述した、禅師の身心脱落の体験である自己他己の透脱、雲門の光透脱、漸源の世界崩壊のことである。当観の境地は仏の悟りの心なのだ。

凡夫の心から、仏の解脱の境地の世界へと転ずる心理的過程を、電車の瑜話と垂直正中線脱落で明らかにしてみよう。当観全体を具体的に下記の順序によって説明する。凡夫心から→仏の境地→当観→脱落の時系列で述べてみる。

凡夫が認識する世界とは、空間的には、三次元の縦・横・高さの東西南北前後左右の宇宙空間のことである。一般的に絶対空間と呼ばれている。宇宙空間は不変であり、境界がなく、あらゆる方向に無限の広がりがあり、そして、三次元の立て、横、高さで構成されている。此の空間世界には、山河大地・他者・家族・自己の身心・花・子犬等々が存在する。

そして、時間とは絶対時間と呼ばれている。絶対時間は一次元であり、三次元の空間とは独立した存在である。絶対時間は過去→現在→未来へ進行し、直線的・不逆転的である。同じ歩調で無限に進行し、森羅万象の生滅のことであり、時計の刻時であり、カレンダーの期日であり、自己の生→死のことである。絶対空間と絶対時間の世界は、凡夫の自己が認識できる心的認識領域世界のことを表示している。

禅師は凡夫の時空世界を有時巻の中でこの様に説かれている。

「たとゑば、河すぎ、山をすぎしがごとくなりと。いまその山河、たとひあるらめども、われすぎゝたりて。いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地となりとおもふ」。

また、絶対時間を「十二時(二十四時間)長遠短促のいまだ度量せつといゑども、去来の方あきらかなるによりて、人これを疑著せず」、凡夫は、このような、自己と空間と時間の宇宙世界が真実であると信じている。分かりやすくするために、凡夫の世界を電車の瑜話で説明してみよう。

4　山手線の瑜話

山手線の外回りと内回りの電車の瑜話である。自分は内回りの車両の椅子に坐る。外回りの車両内の窓際に一人の女性が立っていることを確認する。禅師の「河をすぎ、山をすぎ、その山河あるらめど(中略)いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地なり

とおもふとは」とは、電車の椅子に座る自己(主観)が、ガラス窓の外の風景(客観・三次元空間)と、車両内の一人の女性(他己)を認識する世界のことである。
自己は過去の始発駅から、三次元世界の風景の中を進行してきたと思う。同時に、電車が去来進行するように、自己の身心も誕生→現在→未来の死へと、時間が直線・不可逆的に進行する。宇宙空間内の時間の生滅も、窓の外の風景の去来のごとく、過去→現在→終着駅へと進行しているものと信じている。
自分だけではなく、対面する車内の女性自身も同じような時空世界を認識する。そして、椅子に坐る男性を確認し、二人は同空間・同時間の同じ生活環境の世界の中で生存していると思う。そのことに対し疑念をもつことはないし、二人は同じ心理的な認識領域世界を共有しているものと妄信している。当然、そのことに対し疑問もないのである。

禅師は有時巻のなかで、このような凡夫が認識する時間空間世界をこの様に説かれる。

①「仏法をならはざる凡夫の時節にあらゆる見解は、有時のことばをきくにおもはく、或時は三頭八臂となれりき、あるときは丈六八尺となれりき。たとゑば、河をすぎ、山をすぎしがごとくなりと。いまはその山河、たとひあるらめども、われすぎゝたりて、いま玉殿朱楼に処せり、山河とわれと、天と地となりとおもふ」
②「凡夫の有であり、時であり、十二時である(二十四時間)。」
③「経歴をいふに、境は外頭にして、能経歴の法は、東にむきて百千万劫をふるとおもふ」

この様な凡夫の時空観に対して、仏、道元から当に観る、宗教的な時間と空間の世界を開陳する。

①「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」
②「われを排列しおきて尽界とせり、この尽界の頭々物々を、時々なりと覷見すべし」
③「いわゆる山をのぼり河をわたりし時にわれありき、われに時あるべし。われすでにあり、時さるべからず」

上記の仏の時空世界を、再度電車の瑜話で明らかにしてみよう。自己も客観の女性も、三次元の風景世界の中を、山をすぎ河を渡り、現在地に到達したと思う。そして、一次元の車両の進行と風景の去来の時間とともにあったものと信じる。
それに対し、禅師は風景が去来する認識体験は錯覚であり、始めから現在の当地に存在し、過去から現在に到着したことを否定する。当初から自己に全時間が備わっているし、時間そのものだと明言する。

(1)　四次元的時空世界

有時は難解の章で述べたように、有時の時間論は四次元的時空論に近いと説明した。道元の時空観は四次元的(自己即身心即時間即空間即仏性)であり、蔵身した相依性で成立しているのである。
要するに、凡夫の時空と仏の時空は一体なのである。解りやすく述べれば、車内の自己(自己の身心)即車両進行(時間進行・即時)即窓の風景世界(尽宇宙)即風景去来(時間進行・即時)即レール(仏性・不滅・不進行・虚空)は、即一、円融しているのだ。
再度、電車の交叉対面上の瑜話で、二つの宇宙が即一の関係を説明してみよう。仮に時速二百キロメートルの外回りと内回り二つの車両が一瞬対面交叉することがある。対

面交叉する瞬時、二つの車両が静止する。分かりやすく説明すれば、時速二百キロメートル即時速二百キロメートルで同速同時となる。科学では相対速度とも呼ぶ。二つの車両が同速のとき、ゼロ時点となり静止する。一瞬ではあるが、対面する車両の女性が明確に確認できる(千代島雅『アインシュタイン「双子のパラドックス」の終焉』(徳間書房。一九九九年七月）参考)。

本来は、二つの電車は相反する方向に時速二百キロメートルで高速進行しているのである。ここに、二つの時間系が成立する。一つは、電車が過去→現在→未来へ進行する日常の時間。道元は十二時と呼ぶ。もう一つは、二つの車両が交叉対面する、時間の相対速度と静止のことであり、禅師が説かれる、われに時あるべし、われにすでにあり、時さるべからず、仏の時間観で構成されている。

仏から当に観る時は、世界は二つの時間の同時によって成立しているのだ。ただ、車内の二人には、車両の時間の進行と、窓の風景の去来の進行だけが、認識領域世界なのである。

仏教では、静止時間（時空脱落・時間超越）を、般若心経では「空」、涅槃経では「仏性」、法華経では「実相」とよぶ。空は不生不滅であり、不進行(時間の進行が無い)外回りの車内の女性も、椅子に坐る自己も、自己の身心全体が宇宙の中心として、進行時間と不進行時間と同時同体として存在しているのだ。

あくまでも、電車の話は喩である。各自･各己の存在全体の即今即時の真実相なのだ。そして、静止のときは、自己は自己の全時空世界であり、女性は女性の全時空世界なのである。岸澤師が説かれたように、各自・各個の静止世界は甲は甲の宇宙、丙は丙の宇宙であり、交叉がないのである。

禅師は、眼蔵第二十二「全機」巻・第二十三「都機」巻で、客観(時間・空間・存在)と主観(自己の身心・時間・空間)と静止(仏性・不進行・虚空)一体関係をこのように説かれている。

「生といふは、たとへば、人のふねにのれるときのごとし。このふねは、われ帆をつかひ、われかぢをとれり、われさをゝをさすといへども、ふねのほかにわれなし」

道元は各自の自己の全存在をこのように述べている。自己の身心は人が舟を乗れるがごとしである。舟の自己とは窓に坐る身心のことである。われが帆を使い、舵をとり、竿をさしているが、ふねのほかにわれなし、全てが自己の全宇宙である。窓に坐る自己の一切の行為を示している。

そして、正当恁麼時、当に仏眼から観る時節、全てが自己の世界である。天も水も岸もみな舟の時節となれり、(中略)舟にのれるには、身心(自己)依(客観)正(主観)、ともに舟の機関なり。尽大地・尽虚空ともに舟の機関なり、と自己の真実相をこのように明らかにしている。舟のほかにわれなし、舟とは全自己のことだから、天も水も岸も全宇宙が自己の時間の世界なのである。

亦、禅師は、自己(身心存在)と月と舟と雲と岸との関係をこの様に明述する。

「釈迦牟尼仏、告金剛菩薩言「譬如動目能揺堪水又如定眼猶廻転火。雲駛月運舟行岸移、亦復如是」。「いま如来道の《雲駛月運、舟行岸移》は、《雲駛》のとき、《月運》なり。《舟行》のとき、《岸移》なり。いふ、宗旨は、雲と月と、同時同道して同歩同運すること、始終にあらず」

雲とは心のこと、月とは仏性のこと、舟とは自己の存在と身心のこと、岸とは客観の

宇宙のことである。そして、雲駛るとは心の働き、月動くとは機関、舟行くとは自己の行い、岸移るとは、尽宇宙(森羅万象)の時間の生滅進行のことである。

そして、雲駛月運舟行岸移（駛運行移･同時生滅）は同時同道同歩同運である。これらは一体である。同じ時間であり、同じ道であり、同じく歩み、同じく動くのである。雲駛月運舟行岸移同時同道同歩なのである。分かりやすく説明すれは、無限の一本の垂直正中線〈永遠〉(雲駛月運舟行岸移同時同道同歩）上に、これらは一体蔵身と同時に舟行（自己進行・生滅・行為）と雲駛(心も動き･認識)月運（レールの進行）と岸移（風景去来）とは、同時・同道・同運（自己全存在と同時間・同歩調・同機現）なのである。

電車に坐る自己存在と全宇宙世界は一如であり、宇宙が自己であり、自己が動くとき尽宇宙世界一切が動くことなのだ。自己の存在だけではなく、車内の女性も自己の全宇宙で全機しているのだ。宇宙が全機現することであり、そして、有時の巻では有時であり、有であり、時であり、高高峯頂立であり、深深海底行である。わたしは尽現・蓋時と呼ぶ。

垂直正中線脱落で説明してみよう。正中とは、雲駛月運舟行岸移同時同道同歩が、中道・即一・調和のことである。そして、蔵身と円融の意味である。最初の雲駛から最後の同歩は一体で調和した境地なのである。

禅師は第四十三『諸法実相』巻「仏祖の現成は、究尽の実相なり、諸法は如是相、如是性、如是身、如是心、如是世界なり」と示されている。禅師が説くとこによると、覚者の現成の当体は、究尽の実相である。そして、一切が実相(月)とは自己の相・性・身・心・世界が蔵身していることを明らかにする。

十如是は『法華経』「方便品」(坂本幸男・岩本裕、訳注者。岩波書店、昭和三七年七月十六日)からの出典である。「仏の成就せる所は,第一の希有なる難解の法にして、唯、仏と仏とのみ、乃ち能く諸法の実相を究め尽せばなり、謂う所は、諸法の是くの如くの相と、是くの如きの性と、是くの如きの体と、是くの如きの力と、是くの如きの作と、是くの如くの因と、是くの如くの縁と、是くの如くの果と、是くの如くの報と、是くの如きの本末竟究等なり」

十如是の相とは姿相のこと、性とは本性(実相・月)のこと、体とは本体のこと、力とは潜在能力、作とは能力を発揮させる作用、因とは原因、縁とは間接原因、果とは結果のこと、報とは果報のこと、本末究等とは本の如是相と末の如是報は一体・一如であることを示している。

なぜ私が『諸法実相』巻の「仏祖の現成は究尽の実相なり」と「十如是」を示したかと云うと、垂直正中線脱落の仏の境地を具体的に説明しようと考えたからだ。

本来、禅師の教えは脱落地・非思量・不中である。そのため、論理的な説明から超脱し完結している。仏の完結した境地から当に観るときは、諸法実相巻「仏祖の現成は究尽の実相」、有時巻「古仏言、有時高高峰頂立、有時深深海底行～有時大地虚空」は、同意と理解すべきなのだ。諸法実相巻から説かれるときは一切が実相であり、有時巻から当に観るときは、尽界あらゆる尽有は時々であり、有時であり、有・時、なのである。

では、なぜ十如是なのかである。垂直正中線脱落から説明すれば、脱落したのが仏の境地である。其れに対し十如是は凡夫の境地であり、論理的に説明可能な世界なのである。垂直正中線上の十如是「相・性・体・力・作・因・縁・果・報」の各各が、分離した境地であるからだ。

禅師の脱落地は十如是・本末究竟をも解脱した、仏の境地から一切が教示するのである。同時に空間世界「自己の相・性(月)、身・心・世界(岸・風景)」と時間の生滅進行「十如是(力、作、因、縁、果、報)即舟(運行移、同時同道同歩)」が一体蔵身しているのである。

このような一体蔵身している境地を、経豪の『御抄』は諸法実相の外に能説(主観)所

説(客観)有るべからず、と説かれている。そして、一等(一体)の参学とは諸法実相の外に余物交わらなぬところをいふと述べている。

また、経豪は脱落地・非思量の境地は諸法と実相のあわひ、一(実相・月)多(自己・舟)の局量を超越し、解脱ならぬ詞なき所を知るべきである、と説かれている。禅師の教えは全てが説似一物即不中から一切を説示するのである。其れに対し、天台教学では、十如・十法界・三世間・一念三千・絶対妙(妙覚)等々と具体的・論理的・重層的に教示するのである。

このように、禅師の教えは時間論と世界の空間論が蔵身し脱落していると理解すべきなのである。脱落が仏祖の現成、古仏言く有時の境地であり、当に仏が観た宇宙の真実の姿が有時巻で説かれる世界なのだ。正法眼蔵・有時の内容が凡夫に理解が難解な原因もこの点にある。

分かりやすく説明すれば、月運(実相現成)のときは、月に一切が蔵身(円融)し、舟行(自己行持)のときは舟行に他の一切が蔵身するのである。蓋時のときは時に他の一切が蔵身してしまう。舟が自己だから有時の有であり、時、その他一切を呑却してしまう、時が自己なのだから、舟の自己の有を吐却してしまうのだ。

有時巻に「われに而今ある。これ有時なり。かの上山度河の時、この玉殿朱楼の時を呑却せざらんや、吐却せざらんや」、われとは舟の自己のこと。而今とは当に今の時節、当に有時である。過去の山を上り河を渡りし時節で、客観の一切の尽宇宙を呑みつくしていた。即今の玉殿朱楼はときで、一切が脱落している。呑、吐、とは、平等心と差別相のことである。掃蕩門とも扶起門とも呼ぶことがある。

自己の全時(舟行)に、岸移(窓の風景去来・尽宇宙生滅)、同時(即時)同道(同じ行為)同歩(同歩調)であり、無限領域の垂直線上(静止・自己・岸移・同時・同道・同歩)に、一切が円融即調和した時節が呑むである。静止の月（実相）が、自己（主観）と岸（客観）である窓の外の尽宇宙世界一切（円融）を呑み尽くすのである。反対に、吐くとは、自己(主観)が月と岸と一切世界(客観)を蔵身(円融)し世界を吐はき尽くし、全宇宙の自己となる。この境地を、禅師は有時巻で古仏言く、有時深深海底行・有時高高峯頂立と述べている。

（２）　身心脱落と垂直正中線脱落(永遠)

前文では、呑と吐によって、垂直正中線脱落の正中の平等心と差別相と調和と一如を明らかにした。本文では、垂直線と禅師の身心脱落の体験をもって明らかにしてみよう。禅の祖師たちが大悟するときは、道元の「現成公案」の脱落、雲門の光透脱、安谷師の解説、漸源大師の世界崩壊と同様な言葉を機発する。禅師の機発した一声が身心脱落である。

その、脱落時の全体相を一本の垂直線で示現している。垂直線とは無形の無限線の世界のことであり、時間の前と後(過去と未来から超脱)空間の前と後(縦・横・高を十方を脱落)の時空世界を超越した無限世界である。

また、垂直線は仏性巻の当観のことである。当観とは、能観(主観・舟・雲・電車の自己・車両の去来)、所観(客観・宇宙・岸・風景の去来)かかわらず。不自観・不他観の自己他己の分別心をも脱落している。

当観である一本の垂直線上〈永遠〉(雲駛・月運・舟行・岸移・同時・同道・同歩・同運。椅子の自己・車両去来・風景・風景去来・外の女性・去来)に一切が蔵身されている。一切が蔵身された当観の世界は、身心脱落の体験上の最終境地の解脱の心ではない。

脱落の体験は突然の機発によって、漸源大師の云う、世界が崩壊するのだ。無限領域

の一本の垂直線上から宇宙と自己の身心を貫通し透脱するのである。当に垂直線上に蔵身されていた一切が透脱し脱落するのである。

再び列車の瑜話で脱落の経緯を具体的に説明してみよう。椅子に坐る自己が主観(舟行車両去来)、ガラス窓が垂直線(主観と客観の分離)、外の風景が客観(岸移・風景去来・女性・去来)電車交叉(静止・不進行)、忽然、ガラス窓が落下脱落するのである。客観と主観を分離していた世界が脱落することによって、「と・即」が透脱し無となってしまう。観る自己も無、外の世界も無である。言葉を超えてしまった世界が仏の世界なのである。説似一物即不中である。言葉で説こうとしても、真意を明らかにすることはできない意である。ここまでが、脱落した世界の説明である。

悟後、禅師が有時巻頭の「古仏言」とは、当に解脱した境地から、森羅万象を観るとき、以下に示される。

「有時高々峯頂立、有時深々海底行(主観)、有時三頭八臂、有時丈六八尺。有時拄杖払子、有時露柱燈籠。有時張三李四、大地虚空一切(客観)が有時である。いはゆる有時は時すでにこれ有なり、有はみな時なり」

このような仏の悟りの正法眼をもって、有時巻を読解することが基本観点とすべきなのである。